

ピルグリム・ファーザーズとメイフラワー誓約書

落 合 和 昭

1. ピューリタンと新大陸

1492年8月3日、コロンブス(1451 - 1506)はジブラルタル海峡に近い南スペインのパロスから、東洋を目指して、大西洋を西に向かって出航した。それから70日ほど経った、10月12日に、カリブ海バハマ諸島のサン・サルバトール島にコロンブスは上陸した。それから128年後の1620年に、102名(104名という説もある)のイギリス人ピューリタン(清教徒)がメイフラワー号で、現在のマサチューセッツ州プリマス(ボストンの南、約65キロ、ボストンから車で約50分)に上陸したのがアメリカ史の始まりだと言われている。

しかし、後に、ピルグリム・ファーザーズ(巡礼始祖)と呼ばれる、このイギリス人ピューリタンのアメリカ定住はヨーロッパ人による最初のアメリカ定住ではなかった。イギリス以外では、1620年までに、すでに、スペインが1565年に、現在のフロリダ半島の付け根部分の大西洋岸に位置するセント・オーガステインを建設し、1598年には、現在のニューメキシコのほぼ中央部、リオグランデ川沿いにソコロを、1609年には、ソコロから約200キロ北にサンタフェを建設していた。オランダも、1610年前後には、ハドソン川流域を探検・調査し、1614年には、ナソー砦に定住を始め、1626年のニューアムステルダム(後のニューヨーク)建設への足がかりを作っていた。

その上、ピューリタンは、イギリス人として、アメリカに定住した最初のイギリス人でもなかった。1585年に、現在のノース・カロライナ州の沖合の大西洋上にある、長さ約20キロ弱、幅5キロ弱の細長い小さな島、ロアノーク島の北端にウオルター・ローリー(1552?-1618)によってローリー砦が建設され、定

住が始まった。しかし、彼等の定住は食糧不足のために失敗した。翌年の 1586 年 6 月に、イギリス人として最初の世界周航者の荣誉に輝いたフランシス・ドレイク(1543-96)が、そこに立ち寄って、彼等をイギリス本国へ連れ帰った。彼等が、結局、ロアノーク島に定住したのは、わずか 10 ヶ月ほどであった。その後、1587 年に、ローリーによって総督に任命されたジョン・ホワイト船長によって率いられた 107 名(女と子供も含む)の一行が、再び、定住を始めたが、4 年後の 1591 年に、彼等はその場所を捨てざるをえなかった。この二回の定住の試みはいずれも数年のうちに失敗に終わったので、イギリス人による最初の定住とは言えないであろう。

次のイギリス人の定住地は現在のヴァージニア州のジェームズタウンであった。ピューリタンのプリマス定住より遡ること 13 年前の 1606 年 12 月 20 日に、国王の特許状を手にしたヴァージニア・カンパニー・オヴ・ロンドンはクリストファー・ニューポート船長によって率いられた三隻の船に 120 名の定住者を現在のヴァージニア州にあるジェームズタウンに送った。彼等が定住を開始したのが 1607 年 5 月 14 日であった。その後、定住者たちは、病気や栄養失調のために、1608 年の 1 月までに、38 人にまで減ってしまった。しかし、それから 1698 年までのおよそ 90 年間、ジェームズタウンはヴァージニア植民地の首都になった。

スペイン人やオランダ人の定住、さらには、ジェームズタウンのイギリス人の定住という歴史があるにもかかわらず、多くのアメリカ人はピューリタンがプリマスに定住した 1620 年がアメリカという国の礎となった年であると考えている。これには、いくつかの理由が考えられると思うが、最大の理由はピューリタンが、アメリカ上陸を前にして、ケイブ・コッド沖で、1620 年 11 月 11 日に、メイフラワー号の船上において、Mayflower Compact、「メイフラワー誓約書」という一種の取り決めをしたことによると思われる。しばしば、このときのピューリタンは女性や子供を含めて 102 名であったと言われているが、正確には、ピューリタンと呼ばれる人たちは妻や子供も含めて 41 人、10 人中に約 4 人にすぎなかった。

『ピューリタン神権政治』⁽¹⁾によれば、メイフラワー号の乗客及び乗組員(104名の説に従っている)の内訳は

ピューリタン・・・・・・・・・・41名(男17名、女10名、子供14名)
ピューリタン以外の同乗者・・・・・・・・41名(男17名、女9名、子供14名)
雇い職人・・・・・・・・・・5名
召使い・・・・・・・・・・18名

であった。雇い職人と召使いを除いた、ピューリタンとピューリタン以外の同乗者が人数においても、また、男、女、子供という内訳においても、ほぼ同数であるというのはとても興味深い。

さて、これからアメリカに上陸するというときになって、ピューリタン以外の者たちは、上陸後は、ピューリタンと別れて、別行動をとりたいと言い始めた。そこで、彼等のグループが分裂することを恐れたピューリタンは、全体を一つにまとめる意味で、「誓約書」を作成した。これが有名な「メイフラワー誓約書」と呼ばれているものである。この「誓約書」は、上陸してからは、話し合いを重んじる政治的で、民主的な組織として行動するという約束事、すなわち、同意書であった。この「誓約書」が社会契約思想やアメリカで生まれ、育ったと言われている民主主義の源になり、さらに、それが1776年のアメリカの独立や1787年の憲法制定に当たって、大きな力になったと考えられている。社会契約について言えば、ジャン・ジャック・ルソー(1712-78)が、1762年に、『社会契約論』を書き、その中で、これからの国家は主人と奴隷のような主従関係からなる契約ではなく、自由であり、平等であり、独立している個人と個人の関係から生まれる契約に従うべきであると説いた。

ジェイムズタウンのイギリス人はジェイムズ国王の意志やイギリス国教会の決定に従っていたため、ある意味では、ルソーの言う、主人と奴隷という主従関係からなる契約に従っていたことになる。それに対して、プリマスのピューリタンは、宗教的には、いわゆる、分離派であるため、イギリス国教会から離

脱したことになり、彼等とは明確な一線を画していた。そのため、彼等はイギリス国王やイギリス国教会から離れた、独立した、自由な集団であるという意識も強かったに違いない。彼等は、イギリス国王やイギリス国教会から独立した今、イギリス本国の意向に従う必要はないと考えていたと思われる。

彼等は、アメリカへの来る当たって、彼等から見れば、かなりの額の借金をしていたが、この渡航費用という経済的な負担以外は、彼等を拘束するものは何もなかった。そのため、冬の未開地に放り出された形になった彼等にとっては、彼等がこの大自然の中で生き残り、借金を返すためにも、集団内の強い団結が必要であった。彼等が分裂を最も恐れたのは無理からぬことである。じっさい、彼等がすべての借金を返し終えるのが 1627 年であるので、彼等は、7 年かかって、借金を返したことになる。彼等にとっては、完全な自立はそのときであったと言えるかもしれない。そこへ至るまでの第一歩として、彼等は、これから先、お互いの中で、取り決めた契約、すなわち、彼等にとっては、ある種の憲法である「誓約書」に従ったのである。

アメリカへ移住したピューリタンの中心をなした人々はイギリスのシェフィールドの東、約 30 キロのところにあるノッティンガムシャーの小さな村スクルービーの出身者であった。彼等はジェームズ一世(1566-1625、在位、1603-1625)のイギリスで激しい弾圧を受けたため、1608 年に、彼等は信仰の自由を求めて、当時、宗教に対して寛大であったオランダのアムステルダムへ移住した。彼等は、まさに、同じ空気を吸っていたシェイクスピア(1564-1616)の同時代人であった。オランダに到着してから、およそ一年後、彼等はアムステルダムを離れ、アムステルダムから南西約 35 キロほど下がった、当時、まだ 2、3 歳であった、後のオランダを代表する画家レンブラント(1606-69)の生まれ故郷ライデンへ移住し、そこに、1609 年から 1620 年まで、足かけ約 12 年ほど住んだ。

彼等のオランダでの生活は、宗教的には、自由であっても、彼等の霊的な生活は決して満足できるものではなかったろう。彼等は、周りの人々が自由であるがゆえに、欲望に支配され、振り回されている姿を数多く見たに違いない。彼等が、このままでは、信仰の後継者である子供たちも世俗的なことに興味を

持ち、神をないがしろにするような生活を好むようになるかもしれないという危惧の念を持ったことだろう。しだいに、彼等は新しい住処を探す必要性を感じ始めたに違いない。ヨーロッパで、宗教に関して最も寛大であるオランダに来てさえ、靈的には、満たされないことがわかった今、ヨーロッパ、いや、世界を見渡したところで、人が住んでいるところでは、靈的に豊かな生活が送れないということが身にしみたことだろう。すべての世俗的な社会から解放されて、信仰第一の生活、「まず神の国と神の義を求めなさい」(マタイによる福音書、第6章第33節)が実践できる場所、彼等が信仰を第一にした社会を創るためには、新大陸以外には残っていないという結論に達したのは、彼等にとっては、むずかしい決断ではあったものの、必然的な結果だったのかもしれない。

やがて、このような状況を見て取った、彼等の指導者、ジョン・ブリュースターが現在のヴァージニア州に植民地を建設するという名目でロンドンの商人から借金をし、彼等は、1620年に、オランダでスピードウエル号を購入し、それで新大陸へ向かう予定であった。彼等は、さらに、メイフラワー号をロンドンで貸し切った。彼等はスピードウエル号に乗ってオランダを出航して、イギリスのサザンプトンへ向かった。彼等は、7月の終わりに、サザンプトン港についた。そこでは、すでに、メイフラワー号が彼等の到着を待っていた。彼等は、8月の初めには、そこからアメリカに向かって出航する予定であった。それは、冬が来る前に、どうしてもアメリカへ到着したいという気持ちがあったからである。しかし、二隻の船がサザンプトンを出航してまもなく、スピードウエル号が水漏れを起こしたので、修理のために、彼等はプリマス港の東、約40キロのところにあるダートマス港に引き返さざるをえなかった。その後、修理を終えたスピードウエル号とともに、再び、メイフラワー号は、クリストファー・ジョーンズ船長の下、1620年8月23日に、ピューリタンを乗せて、イギリスのダートマス港を出航し、アメリカに向かった。そして、出航した翌日、8月24日には、再度、スピードウエル号は水漏れをおこし、二隻の船は、やむを得ず、イギリスのプリマスに引き返した。しかし、スピードウエル号が大西洋を横断するのは不可能であるということがわかり、やむをえず、メイ

フラワー号だけが、再び、9月6日に、アメリカに向かった。彼等は、最初に、新大陸へ向かう予定であった8月の初めから数えると、ほぼ一ヶ月の遅れを取ってしまったことになる。スピードウエル号がイギリスを出航して、すぐに、水漏れ事故を起こしたことは、不幸であるかもしれないが、これが、大西洋を西に向かって、かなり進んだ時点で、水漏れ事故を起こした場合は、ピューリタンの新大陸上陸は、少なくとも、その年には、無理であったかもしれない。

最初は、この二隻の船に分乗して、新大陸へ行く予定であった者が、急遽、やはり、スピードウエル号と同様に、小さな船であるメイフラワー号一隻に乗船することは、その人数からいって、とても無理であった。そのため、この時点で、新大陸への渡航をあきらめざるをえなかった者もいた。結局、彼等は、全員で、102人となった。そのうち、オランダのライデンから乗り込んだ者は、104人説をとれば、41人で、残りの63人は、新たに、ロンドンやサザンプトンでアメリカ移住の募集に応募してきた人たちであった。アメリカへ着く前の、大西洋横断中には、一人が死んで、子供が一人生まれている。

ピューリタンがイギリスからオランダへ渡り、そして、新大陸へ移住した1608年から1620年頃の時代は、アメリカ史においても、大きな変化が起こりつつあった時代であったが、ヨーロッパの科学史においても、大きな変化がまさに起きようとしていた時代でもあった。

ここで、少し科学史に目を向けてみることにする。ピューリタンがイギリスからオランダに到着した1608年に、オランダのハンス・リップルスハイ(?-1619?)の眼鏡職人が、二つのレンズを組み合わせることによって、遠くのものを見ることが出来る望遠鏡を発明した(望遠鏡は、さらに、前の時代に発明されていたという説もある)。ピューリタンが、オランダ滞在中に、この望遠鏡に関する何らかの情報を手に入れたかどうかは不明である。また、それより18年ほど遡った1590年に、やはり、オランダの眼鏡職人ハンス・ヤンセン、ツッハリアス・ハンセン(1580-1638?)親子によって顕微鏡が発明されている。人間は、顕微鏡によって、人間の目には見えない、微視の世界を見ることができたのに続いて、望遠鏡によって、人間の目には見えない、無限に広がる宇宙

をより近くに見ることができるようになった。それまでの人間は自分の目で見える範囲しか見えなかった、しかし、この時代になって、初めて、人間は、顕微鏡や望遠鏡を通して、じっさいに、目に見える範囲が一気に広がった。それは今まで見えなかったことが見えるようになった時代であった。さらに、ドイツの天文学者、物理学者であるヨハン・ケプラー(1571-1630)は、1609年に、『新天文学』の中で、ケプラーの法則の第一法則と第二法則を、1619年に『世界の調和』の中で、第三法則を発見し、アイザック・ニュートン(1642-1727)の力学誕生の大きな布石となった。また、ケプラーの同時代人、ガリレオ・ガリレイ(1564-1642)も、発明されたばかりの望遠鏡で、天体を観測し、1610年には、『星界の報告』等で天体に関する新しい事実を発表し続けながら、ポーランドの天文学者ニコラウス・コペルニクス(1473-1543)が唱えた地動説も積極的に広げようとしていた。そのため、この時代は人間の世界観、宇宙観、いや、人間観すら大きく変わりつつあった時代である。

しかし、また、ピューリタンがイギリスからオランダ、オランダから新大陸アメリカへ向かった時代は、一方では、ケプラーの母親が魔女の嫌疑を掛けられ、ガリレオも異端審判にかけられた時代でもあった。ヨーロッパの16世紀から17世紀にかけての時代は、「魔女狩り」、「魔女裁判」の嵐が激しく吹き荒れた時代でもあった。この時代は、宗教的には、カソリックとプロテスタントが激しく対立していた時代であると同時に、近代科学と「魔女裁判」という世界も激しく対立していた時代であり、天動説が地動説に取って代わろうとしていた時代であった。この時代は、多くの面で、新旧のものが入り乱れて、激しく対立していた時代であった。このような時代に、ピューリタンは新大陸アメリカへ向かったのである。

ピューリタンたちは、64日間にわたる苛酷な航海の後、同年の1620年11月9日に、アメリカ大陸を目の当たりにする。彼等が最初に見た場所は、そのときから、およそ230年後、病弱のヘンリー・デイヴィッド・ソロー(1817-1862)が、30代のとき、四回にわたって旅をするほど愛した半島、現在のマサチューセッツ州ケイブ・コッドという半島の先端であった。彼は、紀行文のCape Cod⁽²⁾

の中で、ケイブ・コッド半島について、

ケイブ・コッドはマサチューセッツの剥き出しの、曲がった腕である、肩はバザード湾にあり、肘、すなわち、(肘の先にある)尺骨はケイブ・マルバー、手首はトルロ、砂だらけの拳はプロヴィンスタウン、、、

(括弧内は筆者)

と身体になぞらえて書いている。

このケイブ・コッド半島は最初に行く予定であったヴァージニアのはるか北、約 800 キロのところにあった。この半島は大西洋に三日月のように突きだした半島で、三日月の欠けた部分がケイブ・コッド湾になっている。現在、この湾は、ホエール・オッチングの場所として、よく知られている。プリマスはその半島の付け根の部分から、ボストンに向かって、北に少し上ったところにある。半島の先端からプリマスまでは、湾を横切った直線距離にして、35 キロほどである。最初、ピューリタンたちはその半島の周りを船で探索を始めるが、強い風のために、それをあきらめ、11 月 11 日に、半島の先端にある入り江、現在、人口約 3,400 人の町プロヴィンスタウン港の沖合に錨を降ろした。このとき、上陸する前に、船上で署名したのが「メイフラワー誓約書」であった。彼等は、12 月 12 日までの一ヶ月間、その半島に滞在した。そのため、ピューリタンがアメリカ大陸で最初に上陸したのはプリマスではなくて、ケイブ・コッドということになる。プロヴィンスタウンには、1910 年に、ピューリタンのアメリカ最初の上陸を記念する高さ約 75 メートルの「ピルグリム記念塔」が建てられた。私事にわたって恐縮だが、筆者もこの塔に登ったが、エレベーターはなかった。また、彼等の最初の上陸地点は「最初の上陸地点公園」という小さな公園になっていて、そのことを示す碑も建っている。

彼等はケイブ・コッドに到着してから約一ヶ月後の 12 月 12 日に、そこをあとにして、ケイブ・コッド湾を横切り、プリマスに向かった。この時点で、出発前のイギリスで、約一ヶ月、アメリカへ来てから、一ヶ月の計二ヶ月という

貴重な時間を失っているのに、ピューリタンはアメリカでの定住生活を始める時期が二ヶ月遅れたことになる。この二ヶ月という時間の遅れが、ピューリタン一行の中に、飢えや寒さによる多くの犠牲者を出したことと無関係ではあるまい。

もしピューリタンたちがケイブ・コッド半島に来たときの自然と、現在のケイブ・コッド半島の自然が同じであるとすれば、彼等がケイブ・コッド半島を捨てた理由は、半島の先端あたりの小高い丘に立ち、周囲を眺めてみると、だいたい推測することができる。まず、この辺りは風が強く、土地はほとんどが白い砂である。そのためか、植物は丈の低い灌木や藪程度のものしか生えていない。これでは、畑に作物を植えたにしても、ほとんど何も育たないだろう。また、生活に最も大切な水もほとんどない。現在でも、プロヴィンスタウンは他から場所から水を引いてきている。

彼等がプリマスで最初に上陸するとき、最初の一步を踏み出した岩が「プリマス・ロック」と名づけられて残っている。その岩には、「1620」と彫られている。しかし、この岩がピューリタンたち最初の一步を踏み出した岩であるということを疑問視する人もいる。彼等がプリマスに来たときには、102名が99名になっていた。それは航海中に、1人が亡くなり、プロヴィンスタウンでは、4人が亡くなった。また、航海中に、1人が生まれ、プロヴィンスタウンでも、1人が生まれたためである。プリマスでは、一冬過ごす間に、およそ半数、99名のうち50名のみが生き残り、残りの者は飢えと寒さと病のために、亡くなった。

プリマスに近いボストンは、冬になると、12月の最高平均気温が4.4°、最低平均気温が-2.7°、1月が2.4°と-5.6°、2月が3.2°と-5°であり、ときには、零下15度から20度近くになることもある。冬が訪れたニューイングランドの12月の半ばで、家もなく、暖房もなく、野宿同然の生活では、温暖なイギリスの気候に慣れたピューリタンにとっては、冬のプリマスは想像を絶する寒さであったにちがいない。翌年の1621年4月5日に、生き残った乗組員たちはメイフラワー号でイギリスに帰って行った。しかし、アメリカに上陸

した者の約半数が飢えと寒さと病のために死んだにもかかわらず、ピューリタンの決意は固く、彼等のうち誰一人として、イギリス本国には帰るものはいなかった。メイフラワー号のイギリス到着は5月6日だった。最初の冬には、ピューリタンは半数にまで減ってしまったが、その後、彼等の中からは、何年にもわたって、ほとんど死者は出ていない。インディアンからこの土地での作物の育て方や寒さに強い衣服の作り方等を教わったからである。彼等の助けがなかったら、ピューリタンは全滅していたかもしれない。ピューリタンの最初のアメリカ上陸からほぼ1年経った1621年11月に、「フォーチュン号」が35人の新しい移民を連れて、プリマスへ来た。その「フォーチュン号」は、同年の12月13日には、イギリスに帰って行った。続いて、1622年10月には、「パラゴン号」が67名の移民を連れて、プリマスへ来た。そして、その2週間後には、「パラゴン号」はイギリスに帰った。このように、最初のピューリタンたちは彼等だけの孤独な長い年月を過ごしたのではなく、近くには、インディアンもいただけでなく、また、新しい移民も、人数こそ少ないが、次々に、新大陸にやってきた。

この航海以前のメイフラワー号は、商船として、タール、材木、魚を運搬し、おもに、バルト海を行き来していた。また、グリーンランド近海での捕鯨や、地中海で、ワインやスパイスの運搬にも使われていた。この航海以後のメイフラワー号はイギリスに帰り、さらに、商船として、スペイン、アイルランド、フランスとの間を往来した。その後、2年間ほどは、老朽化が激しいため、船としては、使用されなかった。そして、1624年には、スクラップにされてしまったため、メイフラワー号は現存していない。

このことからわかるように、メイフラワー号は、もともと、客船ではなくて、商船だった。最初から人間を運ぶようには造られていなかった。ピューリタンはこの船であの大西洋を二ヶ月もかけて渡ったことを考えると、それがいかに大変であったかが容易に想像される。メイフラワー号の正確な大きさはわかっていないが、約180トン、長さ約34メートル、幅7.5メートルぐらいであったと言われている。筆者はメイフラワー号を模して建造されたメイフラー

世号をプリマス港で見学したが、その船があまりにも小さいのに驚いた。この小さな船に 102 人も乗り込んで、いったい、どこに、どのようにして寝たのか、不思議に思うほどである。メイフラワー号は、最初は、80 人を乗せて、アメリカへ行く予定であったが、スピードウエル号が水漏れ事故を起こしたため、スピードウエル号からさらに 22 人を引き受けて、アメリカへ出発したのであった。

2. メイフラワー誓約書

ケイブ・コッド沖のメイフラワー号船上で、41 名によって署名された「メイフラワー誓約書」は、Plymouth Colony: Its History and People 1620-1691 によれば、全文で、

In the name of God, Amen. We whose names are underwriten, the loyall Subjects of our dread soveraigne Lord, King James, by the grace of God, of Great Britaine, Franc, and Ireland king, defender of the faith, etc. Haveing undertaken for the glorie of God, and Advanceme[n]t of the Christian faith, and honour of our king and countrie, a voyage to plant the first colonie in the northerne parts of Virginia; doe by these presents, solemnly and mutually in the presence of God and one of another, covenant and combine ourselves together into a civill body politick, for our better ordering and preservation, and furtherance of the ends aforesaid; and by vertue hereof to enacte, constitute, and frame, such just and equall lawes, ordinances, acts, constitutions and offices, from time to time, as shall be thought most meete and convenient for generall good of the Colonie; unto which we promise all due submission and obedience. In witnes wherof we have hereunder subscribed our names at Cape-Codd the 11 of November, in the year of reigne of our soveraigne lord, King James of England, France, and Ireland, the eighteenth, and of Scotland the fiftie-fourth. Anno Dom, 1620.

という短いもので、一種の同意書である。日本語訳では、

神の御名において、アーメン。われらの畏れ多き統治者である君主、神の恵みにより、グレート・ブリテン、フランス、及び、アイルランドの王、信仰の擁護者であるジェームズ国王の忠実なる臣民であり、下記に名を連ねたわれらは、神の栄光のため、キリスト教信仰の発展のため、われらの国王と祖国の名誉のために、ヴァージニアの北部地方における最初の植民地を創設するがゆえに、航海を企て、この証書により、神の御前とわれらの前ににおいて、厳粛に、相互に契約し、団結して、政治団体を作り、これをもって、われらのよりよき秩序と安全のため、かつ、上に掲げた目的の遂行のため、植民地全体の利益のため、最もふさわしく、都合がよいと思われるときに、随時、正しく、平等なる法律、条例、法令、規約、公職を決定し、制定し、作成するために、われらはすべてこれらに対し当然の服従と従順を約束する。その証人として、われらはわれらの統治者である君主、イングランド、フランス、及び、アイルランド、十八年目、スコットランド、54年目のジェームズ国王の治世、11月11日、ケイプ・コッドにて、下記に署名した。紀元1620年。

である。

ピューリタンたちが作成した、この「誓約書」に、102名のうち、41名の成人男子がその内容に同意したうえ、署名した。しかし、ここに署名した41名の成人男子全員がピューリタンであったわけではない。メイフラワー号には、大きく分けて、分離派と呼ばれるピューリタンとピューリタン以外の人たち(その多くは、イギリス国教会に属する人々であったと思われる)が乗り合わせていた。つまり、宗教的には、主流派と反主流派に分かれているので、呉越同舟とまでは言わないにしても、ある種の対立や摩擦が生じてもおかしくない者どうしが同じ船に乗り合わせ、同じ運命を辿ることになったのである。ジェームズ

国王が即位した 1603 年当時のイギリスでは、カソリック、イギリス国教会、いくつものプロテスタント宗派が入り乱れていたため、このメイフラワー号の船上にも、イギリスの宗教的対立の余波が押し寄せていたことになる。つまり、イギリスの宗教的状況の一部がそのままメイフラワー号の船上や新大陸にも持ち込まれたことになる。

James Truslow Adams の *The Founding of New England* によれば、この 41 名のうち 17 名のみがオランダのライデンから来たピューリタンであり、その他の 24 名はピューリタン以外の者であった。前に引用した『ピューリタン神権政治』によれば、ピューリタン以外の者の中で、男は 17 名である。この双方をたしてみると、34 名になる。ということは、雇い職人 5 名、召使い 18 名の 23 名の中から、残りの 7 名が署名したことになる。また、それは、署名した人の中では、ピューリタン以外の者は、割合においては、過半数を 7 名上回っていたことを意味する。ピューリタンの方が、明らかに、少数派であった。Pilgrim Fathers は、イギリスにおいて、少数派であったが、メイフラワー号船上においても、アメリカにおいても、少数派であった。この少数派であったピューリタンがアメリカ史の始まりとして位置づけられていることは興味深い。

102 名のうち、ピューリタンは妻や子供を含めて 41 名であったが、妻や子供は署名に加わることができなかった。このようなことから考えられることは、この「誓約書」は少数派であったピューリタンの考えのみに基づいて書かれたとは考えにくい。当然のことながら、過半数を上回るピューリタン以外の者や雇い職人や召使いの考えや意見も反映されていると思われる。彼等が、署名者の中に、雇い職人や召使いを入れたことは、当時のヨーロッパの感覚からすれば、驚くべきことであり、あってはならないことであつたらう。というのは、この「誓約書」に同意し、ともに、署名をするということは、署名した者全員の間では、社会的身分や職業が意味を持たず、すべての人が対等で、平等であるということであり、誰一人として、この同意書の下では、ある特権を持つことは許されないということである。すなわち、法の下では、全員が平等である。

この署名を見ると、最初に、ピューリタンの名前が並んでいる。これは、彼

等自身が、最初に、この「誓約書」の原案を作成したことを意味していると考えていだろうか。ピューリタンが、「誓約書」を作成するに当たって、どの程度、ピューリタン以外の者の考えや意見をとりり入れたか、また、一度、「誓約書」が作成されたのち、どの程度、修正され、加筆されたかは不明である。しかし、彼等は、この「誓約書」にも書かれているように、民主的な「政治団体」を結成しようとする意図は持っていたので、おそらく、議論をし、彼等の総意をできるだけ引き出そうとしたに違いない。最後には、ピューリタン以外の者も同意して、双方がともに、署名した。

宗教的には、対立しているはずの主流派と反主流派の者どうしが同じ「誓約書」に署名をするということの中には、諸々のことがかいまみられる。ピューリタンとその他の人たちは、アメリカへの出航直前のイギリスのサザンプトン港で、初めて、お互いに、顔を見合わせた。彼等は友人どうしではなかった。いわば、彼等は、お互いに、見も知らない他人どうしであった。そして、その他人どうしが、たまたま、知り合いになり、大西洋の荒波のなかを、64日間も、ともに、生と死の境をさまよったと言っても過言ではないような航海をしてきた。彼等の中には、対立や摩擦もあったと思われるが、それと同時に、二ヶ月も、想像を絶する航海を経験してきたことによる、ある種の連帯や親しい交流も生まれていたに違いない。さらに、メイフラワー号から見える、厳しい冬にさしかかっているケイブ・コッドの大自然を前にしたとき、やはり、彼等は、現実的で、実利的な方策として、主流派と反主流派に分かれて、別々に行動するよりも、一致団結して、ともに、厳冬のニューイングランド定住という、目の前に迫った、最大の危機を乗り切ろうと決心したに違いない。

これらのことに加えて、彼等に、この「誓約書」に同意させた大きな要因が他にもあるように思える。この「誓約書」の内容から判断すると、このなかでは、“covenant”が大きな役割を果たしたと思われる。というのは、この語は、『聖書』においては、最も重要な語である。それは、『旧約聖書』では、およそ、300回近く、『新約聖書』でも、30数回、使われている語である。それゆえ、この語は、キリスト教や教会では、神と人間を繋ぐ言葉として、重要な意味を

持ってきた。この語は、日本語では、「契約(または、約束)」と訳されている。この「契約」という語をなくして、キリスト教の神と信者との関係は成立しないと言っても過言ではない。キリスト教においては、この語があって、初めて、神と信者との関係が生まれるのである。『聖書』では、「契約」は、大きく分けて、二つの意味で使われている。一つは神と人間(イスラエルの民)の間で取り交わされる「契約」であり、もう一つは人間と人間の中の「契約」である。言うまでもなく、ピューリタンたちが署名した「誓約書」の「契約」は人間と人間の間で結ばれた「契約」である。「契約」は、ユダヤ教が生まれたときから、その中枢をなす考えであった。それはイエスが生まれた後も、キリスト教に受け継がれ、教会の信者の間では、最も慣れ親しんだ語であった。それは、カソリックであれ、ギリシャ正教であれ、プロテスタントであれ、同じであった。それゆえ、分離派であり、反主流派であるピューリタンにとっても、主流派であるイギリス国教会に属している、ピューリタン以外の人たちにとっても、信仰に対する態度の違いはあっても、「契約」が大きな意味を持っているという点では、同じであった。そして、「契約」が「契約」であるためには、すなわち、神と人間の中の「契約」にとって、最も重要なのは、その「契約」に対する服従である。服従を伴わない「契約」は意味をなさないばかりか、それは「契約」とは呼ばない。「契約」に対する服従があって、初めて、「契約」は「契約」として存在する。それは、人間どうしの「契約」についても、同じである。キリスト教徒にとって、人間どうしが「契約」をするためには、神の前で、「契約」を誓う。その「契約」の形が、この「誓約書」の中にも、見られる。

そのため、この「誓約書」の中で、“ In the name of God, Amen ”、「神の名において、アーメン」という書き出しだけではなく、前半部分では、“ by the grace of God ”、「神の恵みによって」、 “ for the glory of God, and advancement of the Christian faith ”、「神の栄光とキリスト教信仰の発展のために」、 “ in the presence of God ”、「神の御前において」というように、神やキリスト教に関する表現が繰り返し用いられているのは、神の前で、「契約」を結ぶ者にとっては、むしろ、当然であると言える。もちろん、これらの表現は、この「誓約書」に

のみ限られたものではなく、キリスト教徒の間で、しばしば、用いられる表現であり、特に、祈祷や書簡等では、『新約聖書』の時代から習慣的に用いられてきた。それは『新約聖書』の「ローマ人への手紙」や「コリント人への手紙」等の書簡の冒頭と末尾を読めば、この「誓約書」で使われている、神やキリスト教に関する表現とよく似た表現が繰り返し出てくる。そのため、ピューリタンは「誓約書」を書くに当たって、彼等が、この「誓約書」に限った、独自の表現を用いたわけではなく、彼等が、礼拝や日常生活において、繰り返し用いてきた表現をそのまま使っていることになる。そのため、この「誓約書」の根底には、彼等の信徒としての生活が横たわっていると考えていいだろう。この「誓約書」の書き方は、まさに、彼等にとって、彼等の教会生活や日常生活そのものから生まれたものである。しばしば、この「誓約書」は社会契約論の考えを先取りしているように考えられているが、むしろ、それを言うならば、先取りしているのは、神と人間、人間と人間との「契約」を、人間の生活の基礎においた『聖書』であると言ったほうが正確である。というのは、この「誓約書」は、『聖書』に書かれている「契約」の延長線上で、書かれているからである。

彼等は、ジェームズ一世の統治下のイギリスで、激しい迫害や弾圧を受け、自由な信仰を極度に制限されたために、やむをえず、信仰の自由を求めて、イギリス国教会から分離し、国王や教会の支配から逃れるために、オランダへ、最後の地として、はるかアメリカまでやって来た。しかし、彼等は祖国イギリスを遠く離れ、アメリカへ移住した分離派であるにもかかわらず、この「誓約書」の初めの部分では、自分たちのことを、“the loyall Subjects of our dread soveraigne Lord, King James, by the grace of God, of Great Britaine, Franc, and Ireland king, defender of the faith”、「イギリス、フランス、アイルランドの王にして、われらの恐れ多い君主、ジェームズ国王の忠実なる臣下」と呼んでいるだけでなく、迫害の責任者であるジェームズ一世のことを“defender of the Faith”、「信仰の擁護者」と呼び、さらには、“(for) the honour of our King”、「われらの国王の名誉(のために)」とまで言っている。また、「誓約書」の終わりにも、そ

の前半の部分をほぼ繰り返すような形で、“ in the year of reign of our sovereign lord, King James of England, France, and Ireland, the eighteenth, and of Scotland the fiftie-fourth. Anno Dom, 1620. ”、“ 「イングランド、フランス、及び、アイルランド、十八年目、スコットランド、54年目のジェームズ国王の治世、紀元1620年」と書き、署名した。彼等はイングランドの国王としただけではなく、フランス、アイルランドを支配して18年、スコットランドを支配して54年である国王と書き、ジェームズ一世の力の偉大さを讃えている。

「誓約書」に書かれている、これらのジェームズ国王を褒め称え、讃美している表現はいったい何を意味しているのだろうか。ここには、大きな矛盾が感じられないだろうか。前にも述べたように、彼等は、ジェームズ国王治下のイギリスにおいて、イギリス本国にいられないほど、イギリスには居場所がなくなるほど、激しい迫害を受け続けた。そのため、ジェームズ国王は、ある意味では、「信仰の擁護者」ではなく、彼等の信仰に対する迫害の責任者であると言っても差し支えないだろう。それにもかかわらず、この「誓約書」には、祖国イギリスにいる国王を重んじ、彼に対する忠誠と尊敬が声高に謳われている。さらに、この「誓約書」では、彼を「信仰の擁護者」と呼んでいる。彼等から見れば、むしろ、彼を「信仰の迫害者」、「信仰の弾圧者」と呼んでもいいはずである。彼等は、さらにつけ加えて、「われらの国王と祖国の名誉のために」行動しているとまで言っている。これでは、ある種の、言葉は悪いが、ごますり的な言い方ではないだろうか。この「誓約書」からは、これから、彼等がアメリカに定住するに当たって、彼等がキリスト教徒であるという自覚とともに、ジェームズ一世の臣下であるという強い自覚も、同時に、併せ持っているかのように見える。彼等にとっては、ピューリタンとしての信仰活動と国王ジェームズ一世の忠実なる臣下であることの間には、何ら矛盾が存在していないように感じられる。さらに言えば、この「誓約書」からは、彼等が、イギリスにおいて、激しい迫害を受けた様子は微塵も感じられない。

しかし、この「誓約書」はピューリタンのためだけに書かれた「誓約書」ではなく、ピューリタンと他のピューリタンでない人たちとの合意文書であるの

で、ピューリタンの望みや意思だけが反映されているとはかぎらない。ピューリタン以外の人たちは、割合では、過半数を超えていたので、彼等の考えや意見もかなり考慮して、「誓約書」は作成されたとも考えられる。特に、ピューリタン以外の人々はイギリス国教会に属しているとする、アメリカへ来て、彼等はピューリタンよりもイギリスに属しているという意識は強かったと思われる。それゆえ、ジェームズ国王は、彼等にとって、地上の絶対者であるという思いはかなり強かったと思われる。そのことが、「誓約書」の中に、ジェームズ国王を褒め称える箇所を増やさなければならなかった一因であるとも考えられる。しかし、どの程度までがピューリタンの意思で、どの程度までがピューリタン以外の者の意思であるかの線引きをするのは極めてむずかしい。

しかし、このようなジェームズ国王に対する敬愛の気持ちを表した部分のほかに、「誓約書」の “doe by these presents, solemnly and mutually in the presence of God and one of another, covenant and combine ourselves together into a civill body politick, for our better ordering and preservation, and furtherance of the ends aforesaid”、「この証書により、神の御前とわれらの前において、厳肅に、相互に契約し、団結して、政治団体を作り、これをもって、われらのよりよき秩序と安全のため、かつ、上に掲げた目的の遂行のため」の部分がある。このアメリカの土地では、ジェームズ国王やイギリス国教会による命令によって、行動するのではなく、自らが「政治団体」を作り、それを通して、自分たちのことは自分で決めて、行動するという意思が読みとれる。ここに、契約社会アメリカの原点を感じとる人もいるだろう。この部分は、ジェームズ国王を褒め称えている最初の部分と違って、分離派であるピューリタンにとっては、ジェームズ国王やイギリス国教会による命令に従うのではなく、自分たちのことは自分で決めるのであるから、受け入れやすい部分であったと思われる。しかし、イギリス国教会に属し、ジェームズ国王に忠誠を尽くしている、ピューリタン以外の者にとっては、いくら彼等がイギリス本国から遠く離れたアメリカにいるからといって、ジェームズ国王やイギリス国教会をさしおいて、自分たちのことはすべて自分たちで決めるという考えはあまりにも身勝手な考えであり、

ジェームズ国王やイギリス国教会をあまりにもないがしろにしていると考えたかもしれない。しかし、ピューリタン以外の者も、最終的に、このことに同意した。

彼等がこのような民主的な形の「政治団体」の結成に同意できたのは、当時のイギリスは君主制をとっていたにもかかわらず、物事を民主的に解決してゆこうという機運がかなり盛り上がっていて、それが大きな広がりを持つ裾野になっていたために、彼等はこの「誓約書」に同意できたのかもしれない。そして、このような「誓約書」を書かせた背景には、イギリス本国において、階層的で、墮落していたカソリックに反旗を翻し、自分たちの信仰の自由を強く求め、神と人間の間には、いかなるものも介在させず、人間は、自由な意思をもって、直接、神と人格的な交わりをすることができるというプロテスタントの考え、すなわち、神の前では、すべての者が対等であるという考えが大きな力を持ちつつあった状況が横たわっている。じっさい、この「誓約書」は、ケイプ・コッド沖のメイフラワー号の船上で、作成され、署名されているので、彼等は、そのときはまだ、メイフラワー号の船上にいて、アメリカ大陸に定住していなかった。ということは、彼等は、そのときはまだ、イギリス人であった。括弧付きながらの「アメリカ人」にもなっていなかった。そのため、「誓約書」を作成し、署名したのは括弧付きの「アメリカ人」ではなく、まさに、イギリス人であった。

「厳粛に、相互に契約し、団結して、政治団体を作り」の部分には、これから先、アメリカにおいては、彼等の集団は、宗教集団ではなく、「政治団体」として行動するという意味にとれないこともない。もし彼等が、「政治集団」ではなく、宗教集団として行動するとき、分離派のピューリタンとイギリス国教会に属するピューリタン以外の者の間に、『聖書』の解釈、宗教的な決まりや習慣等をめぐって、お互いの間に、摩擦や軋轢が生じたりする可能性はあったと思われる。じじつ、そのとき、イギリス本国においては、ピューリタンとイギリス国教会の間では、長年、国を揺るがすほどの激しい対立が続いていただけではなく、この後も、数十年にわたって、続くことになる。アメリカに渡った、分

離派のピューリタンたちは、強い結束を持った宗教集団であるにもかかわらず、「誓約書」のこの部分で、彼等の集団を宗教団体としないで、「政治団体」と規定したのは、予想される両者の対立を回避するためではなかったのではないか。彼等の集団が宗教団体になるよりも、「政治団体」になったほうが、彼等が対立したり、分裂したりする可能性ははるかに少なくなり、アメリカにおける「われらのよりよき秩序と安全のため、かつ、上に掲げた目的の遂行のため」にはよりよい、と判断したのではないだろうか。つまり、彼等の集団は、大きく分けて、ピューリタンとイギリス国教会とに分けられるが、その両者の集団全体に網をかけるため、その両者を一つの結束ある集団にまとめるためには、彼等を一つの宗教団体にするのではなく、「政治団体」にしたほうが新大陸での生活は円滑に進むと考えたのだろう。

宗教団体は、原則として、同じ信仰の持ち主の集まりである。ある宗教団体には、当然、その集団とは異なる信仰の持ち主は入りたがらない。宗教団体のほうも、自分たちと信仰がまったく異なる人が入ってくるのをあまり好まない。こと宗教に関しては、妥協を許さない場合が多い。それは、当時のイギリスのピューリタンとイギリス国教会の激しい対立の状況を持ち出すまでもない。宗教的に妥協すれば、信仰そのものを、本人の自由意思でもないのに、変えなければならないことにもなりかねない。そのため、このメイフラワー号でアメリカにきた人たちのように、宗教的には、分裂している集団は自らを「政治集団」と規定したほうが、ピューリタンはピューリタンの信仰を維持することができ、ピューリタン以外の者も彼等の信仰を維持できるのである。そして、彼等の集団を「政治団体」にすると、その集団は、当然のことながら、宗教ではなく、政治を優先させなければならない。宗教的には、妥協がむずかしくても、政治的には、妥協ができる場合がある。というのは、政治においては、多数決を使うので、少数派の人々は妥協しなければならない。また、妥協を得るためには、提案者は、いくつかの面で、相手に妥協しなければならない場合もある。そのため、妥協は、政治においては、必需品であるとも言える。

この「政治団体」という言葉の中には、彼等は、宗教的なもの、すなわち、

宗教的な相違には目をつぶり、このアメリカで定住するに当たって、まずは、双方にとって、益になるもの、「われらのよりよき秩序と安全のため」を選択するという、実質的で、政治的な判断が感じられる。彼等は、厳冬が迫りつつある、アメリカの大自然を目の当たりにしたとき、まず、その厳しい現実を見た。その現実を見て、彼等は、宗教集団としてではなく、「政治団体」として、歩み始めることにした。このとき、彼等は、ピューリタンだけではなく、ピューリタン以外の者も、心中では、宗教と政治を切り離していた。ある意味で、彼等なりの政教分離が行われていた。しかし、彼等にとっては、政治のすぐ背後に、ほぼその政治と表裏一体の形で、宗教があった。そのため、表の政治に代わって、裏の宗教が、いつ何時、表に出てくるのかわからない状態を維持していることになる。アメリカで、政教分離と言う場合、国が宗教を持たない、国が国教を持たないという意味合いが強いが、これは、おそらく、イギリス本国やヨーロッパの他の国々から学んだ知恵であろう。「もし~であったら」という言葉は、許されないと思われるが、あえて、「もし」という言葉を使えば、もしメイフラワー号でアメリカへ来たのが分離派ピューリタンのみであったなら、彼等は、イギリスにいたときのように、宗教集団として、現在、ペンシルヴェニア州ランカスター等に住んでいるアーミッシュの人たちのような生活を続けたかもしれない。彼等が、宗教集団としてではなく、「政治団体」として、出発したことが、後のアメリカ合衆国の誕生にとっては、大きな意味を持っていた。

「誓約書」には、続いて、“ and by vertue hereof to enacte, constitute, and frame, shuch just and equall lawes, ordinances, acts, constitutions and offices, from time to time, as shall be thought most meete and convenient for generall good of the Colonie; unto which we promise all due submission and obedience. ”、「植民地全体の利益のため、最もふさわしく、都合がよいと思われるときに、随時、正しく、平等なる法律、条例、法令、規約、公職を決定し、制定し、作成するために、われらはすべてこれらに対し当然の服従と従順を約束する」と書かれているが、ここでは、「植民地全体の利益のため」に、「正しく、平等な法律、条例、法令、規約、及び、役職を決定し、制定し、作成し」、それに、「我々全員は当然の服従

と従順を約束する」と誓っている。この部分には、彼等の集団が「政治団体」として出発しているだけでなく、法治国家としての道を歩き始めようとする意図が感じられる。

ここでは、「植民地全体の利益のため」と書かれていて、個人よりも彼等の植民地全体の利益が優先されている。この部分は、新しく植民をするにあって、個人個人が勝手きままに行動することを制限している。この表現の背後には、彼等が、いつ何時、分裂するかもしれないという恐れが隠れているようにも感じられる。この「最もふさわしく、都合がよいと思われるときに」の中には、彼等が、定期的ではないが、集会を開いて集まるという意思が感じられる。集会を開くということは、そこでは、なにがしかの話し合いや議論が行われるということである。「正しく、平等なる法律、条例、法令、規約、公職を決定し、制定し、作成するために」の部分はこの集団を、宗教的ではなく、法律的に規制しようとしている。アメリカのように、異なる宗教や人種がともに暮らすためには、宗教や道徳だけでは、統合できない。統合をするのに最も有効な手段は法律を整備することである。その意味でも、彼等の作成した「誓約書」は後のアメリカを先取りしているように感じられる。

おわり

注

1. 『ピューリタン神権政治』初期アメリカ植民地の実像 山本周二著 九州大学出版会 2002年 p14
2. Henry David Thoreau Library of America New York 1895 p851-p852

ラルフ・ウォルド・エマソン(1803-82)とともに、十九世紀アメリカの超絶主義者として知られているのヘンリー・デイヴィッド・ソロー(1817-1862)は、三十代のとき、合計四回も、ケイブ・コッドへ旅している。一回目は、32歳のとき、1849年10月に、親友のエラリー・チャニングとともに、ケイブ・コッド湾側にあるコーハセット(ボストンの南、約32キロ)とサンウイッチ(ボストンの南、約91キロ)を経由して、ケイブ・コッドの先端にある町、プロヴィンスタウンへ行き、帰りは船でボストンへ帰っている。二回目は、33歳のとき、1850年6月に、今度は、一人で、蒸気船

で、ボストンからプロヴィンスタウンへ向かった。三回目は、37歳のとき、1855年7月、エラリー・チャニング、船で、ボストンからプロヴィンスタウンへ向かった。四回目は、39歳のとき、1857年6月、再び、一人で、船に乗って、ボストンからプロヴィンスタウンに向かった。

彼がケイブ・コッドを旅したのが、ピューリタンたちがケイブ・コッドへ来てから250年の月日が流れたあとであるが、彼が残した紀行文 Cape Cod を読むと、ケイブ・コッドの景色が彷彿としてくる。この Cape Cod には、彼の四回にわたるケイブ・コッドへの旅のうち、最初の三回目の旅のことが書かれていて、最後の四回目の旅については書かれていない。自然を愛したソローらしく、同書には、ケイブ・コッドの自然やそこに住む漁師たちの生活が生き生きと描かれているだけではなく、ところどころに、ケイブ・コッドに上陸したピューリタンに関する記述も見られる。

参考文献

1. *The Fathers of New England* by Charles M. Andrews Ross and Perry, Inc Washington DC 2002 Chapter One *The Coming of the Pilgrims*(p1-p20)
2. *The Founding of New England* by James Truslow Adams Simon Publications 1921 Chapter One *The American Background*(p1-p25), Chapter Two *Staking Out Claims* (p26-p40), Chapter Three *The Race for Empire*(p41-p63), Chapter Four *Some Aspects of Puritanism*(p64-p85), Chapter Five *The First Permanent Settlement*(p86-p117)
3. *Plymouth Colony: Its History and People 1620-1691* by Eugene Aubrey Stratton Ancestry Publishing Salt Lake City 1986 Part One: *Chronological Histories* Chapter 1 *The Old Comers(1620-1627)*(p17-p36), Appendix A *The 1621 Peirce Patent* (p393-p397), Appendix B *The 1629/30 Bradford Patent*(p399-p403), Appendix C *Bradford's Mayflower Passenger List*(p405-p410), Appendix D *The Mayflower Compact* (p411-p413)
4. *Macmillan Color Atlas of the States* by Mark T. Mattoson Macmillan Library Reference USA Simon & Schuster Macmillan New York 1996 Massachusetts (p146-p152)
5. *Webster's New Geographical Dictionary* G. & C. Merriam Company Springfield, Massachusetts 1977
6. *Henry David Thoreau* Library of America New York 1895 Cape Cod(p847-p1040), Chronology (p1041-p1051)
7. 『聖書』口語訳 日本聖書協会 1984
8. 『アメリカ合衆国の歴史』 野村 達朗著 ミネルヴァ書房 2000年 第一部 「植

- 民地時代から建国へ」 第一章 「イギリス領一三植民地の成立と展開」 第一節
「近代世界史の始動」(p3 - p7)、及び、第二節 「十三植民地の建設」(p8 - p14)
9. 『ピューリタン神権政治』初期アメリカ植民地の実像 山本周二著 九州大学出版会
2002年 第一章 「ニューイングランド植民地の誕生 アメリカ合衆国の原型はこ
うして作られた」(p1 - p50)
 10. 『アメリカ史』(新版) 編者 清水 博 山川出版社 昭和52年 第一章 植民地
の発展(p16 - p52)
 11. 『ピューリタン』近代化の精神構造 大木 英夫著 中央新書 昭和55年
 12. 『ニューイングランドの宗教と社会』大西 直樹著 彩流社 1997年 付章 『ブ
リマス植民地について』の歴史叙述(p157 - p182)
 13. 『英米史辞典』 編者 松村 赳 富田 虎男 研究社 2000年
 14. 『アメリカの歴史』 サミュエル・モリソン著 西川 正身翻訳監修 集英社文庫
第二章 「ヨーロッパ人のアメリカ発見」(p46 - p80)、第四章 「植民地建設の
時代」(1607 - 27)(p109 - p138)